
サヨナラを告げて...

成宮真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サヨナラを告げて…

【Nコード】

N3351X

【作者名】

成宮真琴

【あらすじ】

私を愛して。

愛せないと言っのならアナタから別れを告げて――

その？

アナタを愛していた。

この胸が焦がれるくらいに。

大好きだった。

アナタ以外愛せないと思った。

でも、アナタはそんな事ないのでしょ？

だって、アナタは私以外の人ばかり愛すのだから。

私達、付き合ってるんじゃないの？恋人同士なのでしょ？

なのにどうして浮気ばかりするの？

愛していないのなら、私以外の人を好きになるのなら、アナタから別れを告げて。そしたら、未練なんか持たずにサヨナラをするから

私から、別れを告げることなんて出来ないのだから――

その？

ああ、まただ。

またアナタは私以外の人と並んで歩いている。

私じゃない人を。

それがどんなに私を気付つけているかも知らずに。

貴方は気づいたりもしないけど街中や人混みの中にいたって私はすぐ、貴方を見つけられる。

だって貴方は目立つもの。格好いいから。

私とは釣り合わない事は分かっているの。

でも、でもね。私は貴方を嫌いになったり、私から別れ告げる事は出来ない。

だって、愛しているから。

だから、例え貴方から別れを告げられても、愛してるって言うてくれなくても、私は貴方を嫌いになれない――

その？（後書き）

誤字脱字があれば、言っ
て下さい m () m

彼氏視点（前書き）

彼氏視点です。

彼氏視点

俺には、彼女がいる。しかし、彼女とはあまりデートやsexなどは、一度もしていない。

なぜかって？

それは、彼女には『彼女』という立場にいてもらうだけでいいからだ。そうすれば、色々な女達と遊べるからだ。まあ、色んな意味でだが。

でも、唯一求めているものは、『癒やし』かもしれない。

彼女が側にいれば、落ち着くし、気が休まる。

まあ、俺の周りには派手な女しかいないので彼女の存在は大切だ。

そう。大切なんだ。

何だかんだと言っても、俺は彼女を大切にしている。

だから、彼女が傷ついていた事なんて分からなかった――

彼氏視点（後書き）

如何でしたかな？

感想お待ちします！

彼氏視点（前書き）

一週間も間が空いてしまつてすみません（――）m
今度は、一週間以内に更新しようと思いますので、宜しく御願います！

彼氏視点

ねえ、私を抱いて。

彼女と、久し振りにデートをした帰りに彼女が言った。

俺は、一瞬動きが止まってしまった。

『な、なに急に変なこと言い出すんだよ。』

『変な事なんて言っていないわ。だって、私達付き合っているんだからsexしたっていいじゃない。』

『いや、そ、そうだけど…。俺、今日はそんな気分じゃないんだ…。』

『嘘つき…。』

彼女が何か小さな声で呟いた。

『え？なに？』

『ううん。何でもないよ…。分かった。やっぱり気分とかあるもんね。やっぱり私、女として見てもらってないんだね。うん…。分かったよ…。今日は、もう帰るね。バイバイ！今日は、楽しかったよ。また行こうね！』

彼女は、一気に喋ってから帰って行った。

彼氏視点（後書き）

感想お待ちしてます（
ε
）

その？

私は、女として見られていないことに改めて思い知らされた。

抱いて――

言わなければよかった。そうすれば、私は傷つかずに済んだのに。

でも、言わなければならなかった。だって、私は決めたから。《友達》として、貴方を愛して行くことを。

だから、サヨナラでわないの。これからも私は貴方の側にいるから。

でも、一応試してみたかった。

貴方が、私をちゃんと女として思っているかどうか。

だけど、そんな想いも木っ端微塵にされちゃったな。

私は、人形じゃないの。ちゃんとした、人間であり、女なの。

だから、私は貴方に最初で最後の我が儘を言うわ。

貴方の側で一生《友達》としていさせて。

例え、貴方が天国へ行ってしまうっても。私は、ずっと側に居るわ。

彼氏視点（前書き）

だんだん、彼女が狂ってきましたf^
|^
^
;

彼氏視点

——友達に戻りましょう？

翌日、彼女から電話が来た。

まさか、昨日の事が関係してるんだろうか？

あの時の彼女の態度からしたらそうかもしれない。

だから俺は——

『それは出来ない。』

とだけ言った。

——でも、私は決めたの。貴方を友達として一生愛することを。

だから、これはサヨナラでわないの。また新しい形になっていくのよ私達の関係は。

恋人でも婚約者でもない、そんなものよりも、もっと大切な存在に。彼女は、最後に——だから、貴方はずっとワタシノモノヨ。

と言って電話を切った。

彼氏視点（後書き）

この先、どんな結末になるのかが作者である私も分からなくなって
きました p（、、q）

その？

『昨日の電話、どういう意味だ！！全然、俺には理解できなかった
！！』

「理解できないものにも、ただ単純に、お友達に戻りましょう。つ
て言っただけよ？」

『何でだよ！何で急にそんな事言い出すんだ！』

「急じゃないわよ？ずーっと考えていたこと。私は、貴方と付き合い
い始めの頃から思っていたのよ。」

『う、嘘だ…。絶対そんな事は無い！途中で気が変わったんだろ！
』

「途中？途中っていつから？貴方は、いつから私が気が変わったと
思っているの？」

『そ、それは……。』

「言えないの？まあ、そうよね。言えないわよね。貴方が浮気した
んだから。でも、普通付き合っただ数日後に浮気する？」

『分かってたのか…。』

「ええ。でも私は貴方を嫌いになれなかった。だから、友達という
選択をしたのよ。私達、付き合っただけなら親友になってたと思

「うわ。」

「……………」

それ以上彼は何も言い返してこなかった。

彼氏視点

私達、付き合ってたなかったら親友になってたと思うわ。

彼女からそんな事を言われるなんて思いもしなかった。彼女は、俺をそんな風に思ってたのか……。

別に、彼女を傷つけるつもりは無かった。ただ、少し別の女と遊んでいただけ。ほんの少しの期間の間。

俺も、彼女と付き合い始めの頃は、『悪いな。』とか思っていたけど、最近は彼女が全然気付いていないと思っていたから、余裕ぶっこいていた。

だから、最初から知っていたと聞かされて驚いた。

それから俺は、何も言えなくなってしまった。

でも、少しでも俺の弁解を聞いてくれるのなら聞いてほしい。

俺は、お前のことが

その？

——愛してる。

「貴方が言つと何故か安つぱく聞こえるわね。」
私は、心の奥底から冷え込んでいくのが分かった。

「それでも、俺は伝えたかつたんだ。伝わってなくても俺は……」
やめて！——どうして今更そんな事言い出すのよ！——どうして……。」

私が貴方に別れ話をしたから？

だから、私を貴方の私物に戻したかつたの？私は、もう戻らない。
あの頃の弱かつた私には。

だから、もうそんな言葉で私を惑わさないで。

私の心が貴方のその言葉で緩んでしまいそうになるから。

だって私もまだ貴方の事を……

愛してる。

その？（前書き）

もうすぐ完結？

その？

私は、今何をしているんだろう？

ただ、毎日を愕然とした気持ちで過ごしている。

最後に彼から電話があった日からもう、1ヶ月以上。

彼は最後に『お前に俺の気持ちに気付いてもらえるように、俺は今までやってきたことを全て清算して来る。それまで、待っていてほしい。どれ位時間がかかるかは分からない。だけど、絶対待っていてくれ。必ず、お前が愛していてくれていた頃の俺になって戻ってお前を迎えに行くから。その時は――』

嬉しかった。

涙が目から溢れ出してきて、止まらなかった。

でも、待っていても《また浮気をしてしまうのでわ》と思ってしま
う。

まだ、信用なんて出来ない。

その反面彼が私を迎えに来てくれると、信じてる。

でも——もう私の答えは決まっている。

私は人形には戻らない。

だから、貴方の私物^{もの}にはならない。

けれど、もし貴方がもう一度私と本当にやり直したいと思うのであれば、貴方が全てを清算した期間と同じ期間で私を捜してみてください。

もし、見つからなければ貴方とは金輪際関わらない。

だから、捜して。

一生懸命私を捜して。

私は、まだ貴方を愛しているから。

貴方がこの手紙を読む頃にはもういないけれど、貴方が私を捜している間は私は貴方を愛しています。

手紙を彼の家のポストに入れて私は、この土地を離れた。

最終話（前書き）

読者の皆さん大変お待たせいたしましたー！！

最終話

あれから、どれくらいの時間が過ぎたのかは分からない。

でも、確信できるのはあの時私が去った土地に戻ってきているという事。

そして、私が最初で最後に愛した人と私達の間授かった子が隣にいるという幸せな日々が続いているという事だけ――

私が、この土地を去って半年が過ぎようとしていた頃に突然彼が、私の実家に訪れてきた。

『久し振り。』

やっと………迎えにくることが出来た。』

そう言った彼は、私が最後に見た彼よりも少し遅しく見えた。

「……………」

会いたかった……

最後の言葉が彼に聞こえたかは分からないけど、私は泣きながら彼に抱き付いた。

愛してる……

だから、結婚しよう。

泣いている私を宥めるように優しく抱き締め、甘い言葉を囁いてくれた。

「……っふ……う……うん……私も」

愛してる……

最終話（後書き）

何とか、最終話にまでたどり着きました。

いやゝ、最初の頃はどのような事やらと思っていたましたが、何とか無事にハッピーエンドとして迎えることができました。

色々ありましたが、最後まで読んでくれて有り難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3351x/>

サヨナラを告げて...

2011年12月3日22時54分発行